会の設立から現在まで

―― 創立前後の事情を中心に ――

副会長　　太　田　時　男

昭和３７年８月１４日、日本科学技術振興財団に事務局を置く任意団体「エネルギー変換懇話会（ＤＥＣ）」が設立された。物性物理、物理化学、機械、電気などを専攻した学者１０数名が集った啓蒙サロンみたいなもので、故久田太郎（元科学技術次官）、高橋秀俊（東大教授、現慶応大教授）、向坊隆（東大教授）、押田勇雄（上智大教授）、岡田利弘（東工大教授）、青木昌治（東大教授）、関口忠（東大教授）、田沼静一（東大教授）、それに私などが参加していた。

ＤＥＣの幾拾回目かの定例研究会が、昭和４８年５月３０日に開催され、私が水素エネルギーの話をした。ちょうど、その頃には工業技術院のサンシャイン計画が、木下亨審議官のもとで煮つめられ、「水素エネルギー」もその１部に加えられることがほぼ内定していた。私の水素エネルギーに関する最初の公表論文は、昭和４７年の春で、その後からも、この問題について、もっと系統立てて組織を作って研究調査しようではないかという提案がおこっていた。安河内昂日大教授は、もっとも有力で熱心なお一人であった。また、赤松秀雄東大名誉教授は、当時、幸いにも横浜国大教授として在職され、化学者の立場から、この問題に深い関心を寄せられていた。

ＤＥＣの昭和４８年６月１９日の合同委員会で、仮称「水素研究会」をＤＥＣの友好姉妹団体としてバックアップすることが承認され、同日、「水素研究会」の発起人会が開催された。赤松、太田、神田、北修一（住友重機）、福井正道（鈴木商館）、門奈五兵（日本酸素）、山本賢三（原研）（５０音字順）の諸氏が当日参加した方々であった。低温工学サイドの方が多かったのは、液体水素を念頭においていたためであろうか。山本氏はＤＥＣ会長として参画され、このあと、現監事の上田隆三氏へバトンタッチされた。

私の原案では、この「水素研究会」は事務的なことの煩雑さを避けるためＤＥＣの部内分科会にしたいと思っていた。しかし、テーマが大きすぎ、ＤＥＣに収容し切れないということで山本氏から独立をすすめられた経緯があり、今では、そうした独立プロセスをたどったことを心から満足に思っている。しかし、実際の事務処理は財団当局の公認で、始終金沢正綱氏（財団振興部次長、現在展示部）のご厄介になった。

さて、６月１９日の発起人会で会の名称、会則の原案が練られ、第２回の発起人会へつなぐことになった。

昭和４８年７月１６日から１８日まで、日光、中禅寺湖畔の金谷ホテルで、茅コンフェランスが開催され、そこでも私が水素の話をすることになったが、たまたま、神田、安河内、門奈の諸氏の他福井氏の代理に米満博夫氏（鈴木商館）も見えておられたので、１７日にホテルロビーで会則の相当詳細な検討を行った。

同年８月２１日、横浜国立大学工学部で、第３回目の発起人会が開催された。この会には安河内氏から強くお願いしていただいて、伏見康治氏（日本学術会議副会長）、若松清司氏（電子技術総合研究所）の有力メンバーに参加願った他、鴨川浩氏（東芝）、篠部健治氏（富士電機）など力強い顔ぶれも見えた。この日の会合において、

1. 正式会名を、水素エネルギーシステム研究会、略称をＨＥＳＳとする。
2. 設立趣意書を現在のようなものにする。
3. 会則案を修正し、現在のようなものにする。
4. 会費額を団体会費年５万円、個人会費２０００円とする。
5. 実行委員を、神田、赤松、太田、安河内、若松、加藤順（８月２１日には益子東工試所長の代理として仁科威郎氏が出席され、その後、益子氏より正式に加藤氏を推せんされた）の諸氏とする。

など５項目が決定された。

昭和４８年９月４日、永田町の電子技術総合研究所で、第１回の実行委員会が催され、

1. 会長に神田英蔵氏、副会長に赤松秀雄氏を選ぶこと。
2. 幹事に太田（代表幹事）、安河内、若松の３氏を選ぶこと。（加藤氏はその後選任）

第１回の研究発表会および発足記念講演会を開催すること。第１回の研究発表会は講師神田、太田、座長赤松とし、昭和４８年１０月２日開催し、当日、記者発表も行うこととする。記念講演会は昭和４９年２月に開催する。

などを決めた。

この時の決定に基づき、各方面へ、神田会長、赤松副会長、太田幹事長の名で挨拶状を送ったり、会員参加の勧誘をするなりの活動が開始された。時、あたかも中東戦のぼっ発をみて、エネルギーの危機感が最高潮に達し、天の時、地の利をうる如くして、ＨＥＳＳの理解も日増しにつのり、旭日の勢いであった。こうした状勢の中で、実質的に団体会員として参加されて助力を下さった各企業に対し、また、積極的に援助下さった日本科学技術振興財団に対し熱い感謝の意を表すものである。

昭和４８年１０月２日、１２月４日の第１回、第２回の研究発表会の盛況をふまえ、昭和４９年２月２１日、朝日講堂で参会者約６００名、講堂超満員という感激的な状況の下で、「核融合と明

日のエネルギー源」（伏見康治）、「水素エネルギー時代はいつくるか」（太田時男）、「太陽にかえれ」（ＢＢＣ科学映画）という講演と映画による発会記念大会が行われたのであった。

昭和４９年の秋から、５０年にわたる厳しい不況下でも、ＨＥＳＳは参加各位の熱意に支えられて、びくともせず伸展してきた。今や、世界にその名を知られ、畏敬されるＨＥＳＳとして、その存在は不動のものとなった。

その後の会の歴史は、年報第１号、第２号で客観的に記載されるだろう。もう与えられた紙面を尽きているが、最後に、創立当時からの事情の相違として特記されるものは、事務局が、日本科学技術振興財団から、工業技術院東京工業試験所へ移転したことで、これは、会がもっと伸展し、独自の事務局をもつことができるまでの暫定的な処置とはいえ、しっかりした機関に事務局をお願いすることができたことを、会員一同とともに心から喜びたいと思う。